大谷教師塾　　教員養成ナビゲーター

〒６０３－８１４３　京都市北区小山上総町
電話　０７５－４１１－８４７６

2013年6月3日
第104号
教職支援センター

「どんな教師を　目指しますか」

大谷大学　教職支援センター
センター長　　岩渕　信明　（いわふち　のぶあき）

巻頭言　岩渕センター長

ある企業の人事担当の方が「最近はみんなまじめなんだけど，明るさやその人らしさがないんだよなぁ。」と言うのを聞きました。教師についても同様のことが言えるのではないでしょうか。まじめです。面接ではそつなく答えられます。しかし，熱いものが伝わってきません。これでは子どもにとって魅力はありません。

「あなたはどんな教師を目指しますか？」教師を目指すあなたにこんな問いかけがなされたらどう答えますか。さらに，「あなたはなぜ教師になろうと思ったのですか」の問いに明確な答えができますか。大学の４年生にもなれば，「どんな教師になりたいのか」という問いに対し，しっかり意思表示のできる教師像を持っていなければなりません。そして，その教師像は子どもに対し熱い思いがほとばしるものでありたいのです。

中央教育審議会「新しい時代の義務教育を創造する」（２００５年答申）で，「あるべき教師像」を示しています。そこではまず，「人間は教育によってつくられると言われるが、その教育の成否は教師にかかっていると言っても過言ではない。」と述べられています。そして，優れた教師の条件として次の３つの要素が重要であると示しています。

①教職に対する強い情熱

教師の仕事に対する使命感や誇り、子　どもに対する愛情や責任感などである。

また、教師は、変化の著しい社会や学校，子どもたちに適切に対応するため，常に学び続ける向上心を持つことも大切である。

②教育の専門家としての確かな力量

「教師は授業で勝負する」と言われるように，この力量が「教育のプロ」のプロたる所以である。この力量は，具体的には，子ども理解力，児童・生徒指導力，集団指導の力，学級作りの力，学習指導・授業作りの力，教材解釈の力などからなるものと言える。

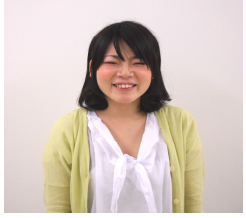
③総合的な人間力

教師には，子どもたちの人格形成に関わる者として，豊かな人間性や社会性，常識と教養、礼儀作法をはじめ対人関係能力，コミュニケーション能力などの人格的資質を備えていることが求められる。また，教師は，他の教師や事務職員，栄養職員など，教職員全体と同僚として協力していくことが大切である。

これら３要素は，単に書物を読んだり，ボランティア活動をしたりするだけでは身につかないものです。常に，なりたい教師像を自分の目標として強く意識し，日々の様々な活動や努力を目標達成への道筋に位置付けていくことが必要です。

教職への情熱，専門家としての力量，総合的な人間力をトータルで求められるのが教師です。それは，ひたむきにがんばる姿であり，また，学び続ける姿勢や子どもの心に寄り添う温かい心です。

その人らしい人間性もその中からにじみ出てくるのではないでしょうか。



３頁　小倉　美佳さん

３頁　海野　良瑛さん

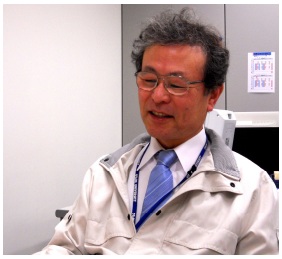
４頁　森谷　萌　さん

新しいアドバイザー紹介・・・・・・吉川栄一（よしかわ　えいいち）先生を迎えました。

「初めまして，教職アドバイザーの吉川栄一です。

今、『ゼヒトモ』先生になりたい皆さんのお役にたちたいと強く思っています。教師の仕事は、すぐに結果が出ず即効性が少なくて苦しいことも多いのが特徴です。しかし、努力すればするほど達成感が大きくやりがいのある素晴らしい職業でもあります。自分の目指す教師像をしっかり持って、教員採用選考試験を突破してください。

『先生になる』という強い気持ちが、あなたの夢を実現することにつながります。」



相談に応じる　吉川先生

（なお、吉川先生は長らくお世話になった細谷僚一先生の後任として着任されました。）

本人の希望によりこの記事は削除しております。

小学校理科の充実のために

栽培学習をした学生の感想

- 草花に接して春を「体」で感じることができた。
- 雑草といわれる植物もしっかりと根を張っている。
- 土を運んで、「土は重い」と知った。
- 土にふれて植物の思わぬ成長を見つけるチャンスだとわかり感動した。

「大谷大学の学校園で『ノースポール』を育てる小川　健一先生に聞きました。」

質問：「先生は栽培園での技術習得に特に力点を置かれ指導されています。小学校理科教員として本学の学生が、今、『求められる力』についてお話ください。」

小川：「特に気がかりな点は、生物単元における栽培に関する知識や技術です。例えば、3年生の理科の担任として4月にまず、自然に触れさせ、そこから学びを構築しますが、『草の名前』が分からないと話になりません。また、春に種を蒔いても『発芽』しないなど、先生に起因する指導の課題が指摘されています。

質問：「それでは、実際の苗の観察記録は書けませんね。どうするのですか？」

小川：「事前の指導計画では、実際の苗を見て観察の記録を書くことになっているのですが（ひまわりの）種が『発芽』しなかったので教科書の『そだつようす』を単に、写す作業になります。」

質問：「それでは、『自然の観察』ではない！駄目ですね。」

小川：「そうです。ですから、本学では少人数によるクラス編成を活用し、学校園などでの栽培技術を『土つくり』や『種まき』などをはじめとする実習を疎かにせず、その弱点の克服に丁寧に取り組んでいます。ですから、左記のような実直な感想が学生から得られたのです。」

質問：「なるほど。先生が理科好きになれば、きっと子どもに伝わりますからね。小川先生、有り難うございました。」

カナダ留学…「勇気を出して、一歩前に」

文学科　第4学年　小倉　美佳（おぐら　みか）

私は大学を通じてカナダのカムループスへ約８ヵ月間留学しました。きっかけは、３年生になったことを機に国語科の教師を目指していたのを英語科へと転換させたことからです。英語を教える喜びはもっているものの、勉強すればするほど自分自身の英語力の無さを感じ、このまま教師を目指して、子どもたちへ十分に英語を教えられるか不安に感じました。

カナダの英語は日本人にとって聞き取りやすい英語だと聞いていたので、日本人に教えるための英語を習得したい私にとってとても良い環境だと思い、迷わずカナダを留学先として選びました。

カナダでのもっとも印象深いことといえば、「生きた言葉」に直に触れていろんなことを学べたことです。

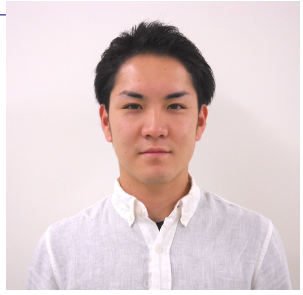
たとえば、ホストファミリーと他愛もない会話をするとき。スーパーやコンビニエンスストアで買い物をするとき。学校で先生に質問するとき。テキストや教科書通りのシチュエーションには、ほとんどならないということです。

今まで必死に覚えてきたフレーズも役に立たず、悪戦苦闘の毎日でしたが、これが英語を話すということなんだと、生きた言葉に触れる貴重な機会でもありました。

カナダでの生活は、これまでの日本での私の生活と全く違っていて、非常に内容の濃い、充実したものでした。留学生の中には、毎日、日本人留学生でかたまっていて、日本にいるのと何ら変わりのない生活を送っている人たちもいます。それはそれで、気が休まることも多く、母国語がいかに便利で大切なものかを知れますが、それではわざわざ自国を離れてカナダまで来ている意味がないと思います。日本でもできることを、わざわざ外国に来てまでする必要はない。そういう意味で、今回留学して、生活が一変したことに私はとても満足しています。

人との出会い、交流、英語学習などすべてが私にとって刺激的でした。この留学での経験を次のステップとして役立てたいと思います。

実践から学ぶ
～教員採用選考「直前面接セミナー」受講を通して～



真宗学科　第4学年　海野良瑛（うんの　りょうえい）

「近年、多くの都道府県の教員採用選考試験には、一次選考から個人や集団面接が取り入れられるようになってきた。これは、筆記試験のみでは図ることのできない受験者の人物像を見極めるために加えられたものであり、つまり教育委員会はその受験者自身の全体像を見極めるためである」と先生が仰っていました。私は、なるほどと納得し本学の先輩の方々の推奨される「直前面接セナー」を受講しました。以下、報告します。

私はこの面接セミナーに、「教員志望の自分らしさ」をどのように出し、それをどうしたら相手に効果的に伝えることができるのかということを念頭において臨みました。

実際の面接の練習では私達も「受講生」のみではなく「面接官」としての立場の相互の役割を担いました。受講生として初めは面接者の立場に皆、戸惑いましたが段々慣れてくると様々な多角的な質問ができるようになりました。

次第に教育委員会側の立場を経験していく中で受講生の姿勢の崩れや表情、話すスピード、返答の簡潔さなど気になる点が見つかるようになりました。それらを面接官としての言葉で感想を述べるという「フィードバック」体験で自分一人では気付くことができなかったことに気付くことが出来たと思います。

また、自分の頭と口は面接官の問い掛けに簡単には連動してくれないということも痛感しました。

事前に配布された質問例にしっかりと返答を書けていたとしても、いざ椅子に腰をかけ質問されたときには、思い通りにはなかなか口は動いてはくれません。実践的な練習をしたからこそ感じることができたのだと思います。

教職を目指すもの同士が集まり取り組んだこのセミナーは、互いを非常に高めあう「伸びしろ」を自覚できた良い機会にもなりました。

採用選考試験まで残りわずかです。直前講座での学びを生かし、自分らしさや教職への熱意を表現できる精一杯の準備をして臨みたいと思います。

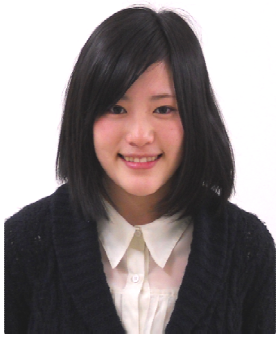
＊このページの筆者、小倉さんと海野君には、共通点があります。
強い教職希望（小倉さんは中学校の英語教員に、海野君は小学校教員に）は当然ながら小倉さんは記事のように留学しました。

海野君も一年間オーストラリアに留学し二人とも海外で見聞を広め多国籍の友達を獲得して将来の自分に自信を得て帰国し、今、本学での学びを加速しています。

本センター相談の窓口の観察では、物事に楽観的で前向きで挑戦的で笑顔が素敵な二人です。ゼヒトモ、念願をかなえてほしいものです。

「心罰～子どもの心を傷つける行為～」　尾木直樹（おぎなおき）　著

文学科　第2学年　森谷　萌（もりたに　めぐみ）



著者尾木さんの横顔

尾木さんは滋賀県米原市伊吹の生まれ。メディアでは難しい教育課題を、分かり易く親切な口調で解き明かすので好評です。氏は日本で初めて「引きこもり」や「不登校」の児童生徒の実数などを明らかにした教育学者でもあります。

書評者の森谷さんはこの本から現代の喫緊の課題を読み解きながら「真に」優れた教師になろうと努力しています。

「パワフルな行動力と明るさで生徒を導く教師」いわば，世間がいう「熱心な先生」。

これが私の理想の教師像でした。いつの日か私(森谷）自身もそのようになりたい，そう思って疑わなかったのです。

しかし，この本に出会い，今まで描いていた理想は単に，私自身が好んだ教師の姿であり，すべての生徒が求める教師像ではないことに気付かされました。

この本の中で尾木直樹氏は題名にもあるように「心罰」という言葉を挙げています。これは彼の造語ですが，シンプルながら私に衝撃を与えました。心罰とは“子どもの心を傷つける行為”のことです。

悲しいことに今や私たちが耳馴れてしまった「体罰」が子どもたちに“見える傷”を残すのに対し，この「心罰」は子どもたちに“見えない傷”を残すものなのです。

とりわけ私が注目したのは第４章にある，“善意の「心罰」”という言葉です。視力・聴力ともに障害をもつ女子学生の手記には『学校や学級のもつ独特の集団的圧力に反発してしまう敏感な子どもに対し，いわゆる熱心な先生達は，“みんなとうまく馴染めないあなたがおかしい。異常だ。”とでも言うように躍起になって指導した“頑張れ”は，もはや励ましの言葉ではない。」と記してあります。個々の生徒の違いを圧殺するこのような善意は指導の名のもとに学校において横行しています。

現代の子どもたちは高度情報化社会の中，大人社会の在り方や学校問題に対する「ひずみ」「汚さ」など，私たちが思っているよりずっと敏感に感じ取っています。子どもたちは彼らなりに対人関係に不安と苦しみをつのらせています。私たち自らの価値観念や規範を押し付けてはなりません。熱い指導・善意の押し付けは「心罰」になりうることをしっかりと認識すべきでしょう。

日本の将来を担う子どもたちの感性や個性を認め，個々の子どもに添いながら柔軟に対応し彼らの能力を引き出すこと。それが教師を目指す私たちに課せられた課題であり使命なのでしょう。

教員採用選考試験を迎える諸君へ

大谷大学教職支援センターでは、馬場・西寺の二人のアドバイザーに加え、今年度、吉川栄一先生を迎えて、君たちの「教職への夢」の実現を日々応援しています。

馬場　信行　アドバイザー

「ゼヒトモ」支援センターに来室を・・・・・

1）　志願者は、教職支援センターに「ゼヒトモ」、現在の状況などを知らせるために、顔を見せてください。
2）「志願書の写真」は記述の内容と同じくとても重要です。
3）　提出までに、何度も支援センターに「書類と顔」を見せてください。

吉川 栄一　アドバイザー

「採用選考まで、『直前の今』、私たちは、具体的に何をしなければならないか？」

それは教師への強い意欲をもちながら、計画的に自分を高めていくことです。「思い」だけでなく、着実な学習の積み重ねが大切です。

西寺　正　アドバイザー

次の言葉を聞き、諸君はどのように具体的に答えますか？
≪各都道府県など教育委員会の求める教師像から参照≫

1）　教育に対する熱意、使命感とは？
2）　豊かな人間性、思いやりのある教師とは？
3）　子どもの「よさや可能性」を引き出し、伸ばす教師とは？
4）　組織の中で、お互いに高めあう教師とは？
（・・・これらは、私にとっても、答えるに最も困難な試問の一つです。）